

2018年12月NHK中央放送番組審議会

12月のNHK中央放送番組審議会は、17日(月)、NHK放送センターにおいて、15人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「NHK経営計画(2018-2020年度)」の修正についての説明があった。続いて、「2019年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。その後、沼にハマってきいてみた「デニム愛を語れ!デニムの町で知られざる魅力を発見!」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

副委員長 大島 まり (東京大学大学院情報学環/生産技術研究所教授)
委 員 石戸奈々子 (NPO法人CANVAS理事長)
今井 忠 (NPO法人東京都自閉症協会理事長)
大川 順子 (日本航空(株)副会長)
木村たま代 (主婦連合会消費者相談室室長)
栗原 友 (料理家)
立野 純二 (朝日新聞社論説主幹代理)
田中 隆之 (読売新聞東京本社取締役論説委員長)
出口 治明 (ライフネット生命保険(株)創業者/立命館アジア太平洋大学学長)
永井 良三 (自治医科大学学長)
仲道 郁代 (ピアニスト)
西原浩一郎 (全日本金属産業労働組合協議会顧問)
花岡 伸和 (一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長)
比嘉 政浩 (全国農業協同組合中央会専務理事)
福井 烈 (公益財団法人日本テニス協会専務理事)

(主な発言)

<2019年度国内放送番組編集の基本計画(案)について ~諮問~>

- 「編集の基本方針」の中の「地球環境や気候変動にも配慮した、働きがいがあり、経済成長も遂げられる持続可能な世界をどう創るのか。」の文章はSDGsそのもの

のなので、その冒頭に「SDGsにもうたわれているように」という表現を入れてはどうか。また、「編集の重点事項」の「6. 多様な価値を認め支えあう社会をめざした放送・サービスを充実」では、多様性が新しい価値を生むという視点を大事にしてほしいと思う。

(NHK側)

多くの方々に初めて読んでいただいたときに分かりやすいように、今回は「SDGs」を使わなくても表現できるのであれば、そのようにしたいと考えている。二つ目の観点については検討させていただく。

- 障害者が「社会に貢献する」という言い方は避けてほしい。「社会に参加する」のは自分だからいいが、障害年金で生活している人は社会に貢献せずに足を引っ張っている人なのだろうか。「社会に貢献する」という言い方は人の価値観でかなり意味が異なる。多くの場合、生産性と同義語に聞こえてしまう。障害があってもいろいろな生き方があるという表現がよいと思う。
- 「貢献」は役に立っているかどうかというイメージが強いと思う。私は「役割」ということばをよく使うが、社会に参加し、役割を持ち、活動している、生きているという表現のほうがふさわしいのでないか。
- 各委員の意見を反映し、今回の原案はできている。原案に沿って番組編成が行われるという前提で今回の原案を可とし、答申したいと思う。異議はないか。
- 異議なし。
- 原案を可とし、答申することにする。

(NHK側)

答申いただきありがたく思う。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、2月の経営委員会に「2019年度国内放送番組編集の基本計画(案)」を提出し、議決を得たい。来年度の具体的な番組編成を記した「編成計画」については、2月に予定している審議会で報告させていただく。

<沼にハマってきいてみた

「デニム愛を語れ！ デニムの町で知られざる魅力を発見！」

(Eテレ 11月20日(火)放送) について>

- 大変楽しく視聴したが、デニムをとことん愛するとどうなるのか、もっと見てみたかった。例えばポケットの端についているリベットという部品や、セルビッチというデニムの生地、裏返したステッチなどにかなり強いこだわりを持つ人も多いのではないかと思う。それぐらい沼にハマってしまうというのがデニムの魅力であり、もっと詳しく知りたかった。番組全体はとても楽しく、特に今回取り上げられた全身デニムの大学2年生、のみくんは大変魅力的で、もっといろいろなことを知りたいと感じさせられた。
- デニムに対して、愛着や独自の哲学を持ち、徹底的なこだわりからデニム製品を手作りする若者の姿を魅力的に表現していたと思う。歴史、製造工程などにも触れており、デニムの奥深さをかなり引き出せていたのではないか。工業高校の授業風景、デニムの聖地としての町づくりに努力する人たちの姿も含めて、バランスよくまとめられていた。ただ、番組全体がうまくまとまりすぎて、「沼にハマった」という表現から想像する内容とはやや違う印象を受けた。番組全体のインパクトを考えれば、主役の大学生にさらに焦点を当てて、例えばデニムにハマったきっかけを掘り下げて強調するほうがより魅力的な番組になったのではないか。のみくんの話聞く時間ももっと取ってほしかった。
- 楽しんで見ることができたが、沼にハマっている割には、出演者があまりにも好青年すぎたように感じた。とはいえ、何事もハマらないと新しい価値は生まれないので、このような番組は続けていただきたい。

(NHK側)

ご指摘の「沼のハマりっぷり」についてはもの足りなさを感じられたかもしれないが、若い人たちは大人と比べてお金をそれほど持っていないので、知恵と工夫で趣味の世界を楽しんでいる。10代向け番組としてその点は大切にしたい。出演した若者から「番組で取り上げてもらって、自分に自信を持つことができた」と言われたこともある。若い人たちがスポットライトを浴びることで、自分自身を肯定してもらえるような番組作りを心がけている。

(NHK側)

今回はハマった若者だけでなく、デニムの町、倉敷市児島の地場産業も取り上げた。それは、デニムをきっかけに日本のよいところ、世界に誇れる日本の技術などを10代の若者たちに知ってほしいという思いからで、さらに番組を作る上で、若者たちに“沼”の広がる世界を見せ、新たな興味発見につなげることも大切にしている。

- 誰に向けて作っている番組なのかがあいまいだと感じた。親世代からするとデニムタクシー、デニムソフトに驚くかもしれないが、若い人がそれほど興味を持つだろうか。この番組で若い人がハマった極端な世界を見せることによって大人も興味を持つことができるとするなら、視聴者を絞るほうが“ハマり感”が出て、より多くの人の興味を引くのではないかと思った。
- 最初は戸惑ったが、おもしろく見ることができた。日本人の感性は独自なものがあり、そこに、今の日本の強みがあるという意味でもおもしろい番組だった。また、グローバルな視点から外国人はどのような反応を示すのか見てみたいと思った。「デニム」や「パンツ」などのことばのアクセントが、ナレーションと出演者たちとで違うのが気になった。1つの番組の中で正しいアクセントに統一すべきではないかと思った。

(NHK側)

ナレーションでは正しいアクセントを使っているが、出演者のアクセントをそのつど直すと番組がうまく進行しないところもあるので、若者のことばには悩みながら番組を作っている。今回出演した大学生は、お金も時間もない中、知恵と工夫、その情熱で、とても頑張っており、ほかの回と比べても相当ハマっていたと思う。極端にハマった世界をどこまで深掘りするのか、多くの人がついていけなくなるのではないかという葛藤の中で番組を制作している。

- 日本の漫画文化が世界で有名になったように、こういったテーマが海外の人からどのように見られるかについても、いずれはフォローしていただきたいと思う。
- 一つのことばにのめり込む、“オタク”をさわやかに描いていた。“オタク”ということばはすでに世界的にも知られていると思うがその一方で、まだネガティブな印

象もある。「沼にハマる」という一般にはまだ広まっていないことばを使うことで、昔ながらの“オタク”の少し暗いイメージに引きずられることなく、ポジティブに表現するということをねらっているのではないかと感じた。番組としておもしろかったが、強烈なインパクトを与えるところまでは至っていなかったように感じる。とはいっても、あまりインパクトをねらいすぎると、関心のない視聴者の共感を得られなくなってしまう。インターネット動画であればそれでいいが、NHKが番組として取り上げるとなるとバランスを取ることが難しいチャレンジングなテーマだと思った。だからこそテレビが今後どう取り扱っていくのか期待して見ていきたい。

- 今回の番組のように、若者が好きなこと、興味があることを自由に楽しくやっていて、結果として地域産業への貢献につながることや、個性を生かして自由にやっていたという姿勢が伝わり大変良かった。若者のさわやかさ、清々しさも応援したい気持ちになった。一方でどうしてこういう若者が生まれたのか知りたかった。地元の倉敷市のジーンズタクシーや、ソムリエ資格の付与などの工夫をはじめ、高校の先生やその授業などが、こういう若者を自然に生んだのだらうと思ひ、まさに今後の地方活性に向けたモデル、若者の個性を生かすモデルになるのではないかと思った。
- 大学を出て、職人になろうという人も出てきているが、若者が職人たちへ敬意を持って、職人を評価しているところがとてもよいと感じた。工業高校もまさにそうだらうと思うが、物作りの現場で頑張ろうとしている若者に好感が持てた。
- 番組を見て、変わっていても個性的でもよいのだ、というメッセージが感じられた。少し変わっていると自分で思っており、そのことで内向きになってしまう人はたくさんいると思う。そういった若者を応援できるような、いろいろなテーマを取り上げてほしい。
- 「沼にハマる」という表現は知らなかったが、倉敷がデニムの町であることは知っており、デニムも大好きなので、とても興味深く番組を見た。沼にハマる若者を紹介するという少し大雑把な内容にも感じられたが、30分という時間の中で深掘りするのは難しいのだらうと思った。こういった番組を見ることで、若者が興味を持つ分野の選択肢が広がるのではないかと感じた。親子で見ることのできるようなテーマも取り上げてもらいたい。
- 服飾というと家政科などのイメージを持っていたが工業高校で衣類などについ

て学んでいることにまず驚いた。親子で番組を見ていることを考えたときに、親が子ども世代を理解したり、若者の進路のヒントにもなる番組だと感じた。今回はテーマがデニムで岡山県だったが、自分の地域がどうなのか考えるきっかけにもなればと思う。一点申し上げるとすれば、出演者が工場で作業をしているときに、長い髪の毛が機械に巻き込まれるのではないかと心配になってしまったので、作業の時は髪を結んだほうがよかったのではないかと。

- 今回の番組は、少し変わった若者を応援するという趣旨が強いのだろうと思った。変わった若者が自信を持ち、未来に向かっていけるような後押しをどんどんしていただければと思った。
- 今の若者たちが何にぶつかって、悩んでいるのかということを考えてときに、大人から見ると明らかに過剰に適応していることが起因しているのではないかとと思う。もっと自分の好奇心を大事にしているのではないかと。ハマり具合の深さよりも、若者たちにとって、好きなことにハマるということは、興味のあることを通じて、自分というものを発見していくことだと思ふ。そういう意味で司会の2人のハキハキした明るさも良かったし、若者たちの好奇心をうまく引き立てていくところにこの番組の意義があると感じた。
- 若者の個性に対する応援歌であるという作り手の意図が分かったので、大いに頑張っていたきたいし、おもしろいものを作り続けてほしいと思う。個人的には、そのテーマに関心のない人もついていけるような質問があってもよいと思った。今回ならば、なぜジーンズを壊すのか、どうしてダメージを与えるのか、穴の開いたジーンズの何がよいのかをどう説明するのも聞いてみたかった。ところどころで一步引いた質問をすることでさらに番組に深みが出るのではないかと考えた。
- ポジティブな意見、さらにハマってほしいという意見が出されたが、ぜひ深掘りをしていただきたい。若い人の好奇心をどう喚起するかも番組の意図されていることだろうと思うので、今後とも頑張っていたきたい。

(NHK側)

若い人たちの個性や好奇心を後押しし、どんどん進んでいんだよという応援歌のような番組を今後も作っていききたい。

<放送番組一般について>

- 11月25日(日)のNHKスペシャル「“ゴーン・ショック”逮捕の舞台裏で何が」を見たが、刑事事件は論点整理が必要だと思う。以前視聴番組にもなり、5月26日(土)に放送された、逆・転・人・生「えん罪・奇跡の逆転無罪判決」(総合 後9:00~9:49)では検察の問題点を取り上げていたが、今回は検察からの情報を前提に番組が作られていた印象だった。ゴーン前会長側の言い分も含めて論点整理をし、当事者双方から見るとということが重要だと思う。「国内放送番組編集の基本計画(案)」にある「情報の社会基盤」も国民が判断する材料を与えるということだが、そのためには情報を多角的に提供する必要があるのではないか。

(NHK側)

この番組では検察からの情報だけでなく、スタジオゲストのさまざまな見方も踏まえて、距離を取ったつもりだが、指摘も踏まえて今後も報道に当たりたい。

- 12月8日(土)のNHKスペシャル「ロストフの 14秒 日本 v s . ベルギー 知られざる物語」を見た。一瞬の駆け引きのすごさ、14秒に世界トップの技術が注ぎ込まれていることを日本代表とベルギー代表の当事者の証言からひもとく番組で、大変興味深かった。なぜ14秒の間にゴールを奪われたのか、一つ一つの細かいプレーの分析があり、それが明確になっていた。1993年の「ドーハの悲劇」、1997年の「ジョホールバルの歓喜」に続き、「ロストフの14秒」も今後サッカー界だけでなく、いろいろなところで語り継がれ、一つの糧になっていくのだろうと感じた。
- 9月2日(日)の明日へ つなげよう「災害ボランティア 奇跡の連携 宮城県石巻市」を見た。災害ボランティアがどのように組織され、どういう問題が起きていたのかについて現場の人たちの証言を丁寧に伝えていた。さらにそれが熊本地震のときにどのように役に立ったかを紹介した上で、その次の問題提起もしていた。短い時間の中で淡々と丁寧に伝える番組ですばらしいと思った。こういった当事者の証言を扱う番組はこれからも続けていってほしい。
- 12月12日(水)の探検バクモン「カワイイ世界に潜入! キャラクター人気の秘密」を見た。キャラクターの誕生から現代までをさらっているにとどまっていた印象があり、なぜそのキャラクターがかわいいと思われているのか深く知ることができなかつたのは、やや物足りなかつた。また、どうして日本人はカワイイものが好きなのかについても、アニミズムという考え方をはじめ、江戸時代の風習から、カ

ルタやすごろくとの関係まで知ることができたが、では現在どのようなキャラクターがいて、どのぐらいのキャラクターが世界で人気があるのかもっと詳しく知りたかった。

- アメリカ軍普天間基地の辺野古への移設問題について、NHKは充実した報道をしたと思う。12月12日(水)のクローズアップ現代+「あさって土砂投入へ 緊迫 辺野古移設問題」は、沖縄の事情を知っている記者と政府の立場を説明する人が出演しており、バランスに配慮した報道をしていると思った。埋め立て予定地に土砂が投入された12月14日(金)の「ニュースウォッチ9」では現場の映像や地元の声伝えていた。基地問題を巡る人々のさまざまな思いには沖縄の今までのいろいろな事情があるが、そういうものを丁寧にすくうのがNHKらしさだと思う。みんな一色ではない、いろいろな要素があることを丁寧に伝えていただきたい。
- 「第69回NHK紅白歌合戦」に初出場することになったグループが、12月14日(金)の「ニュースチェック11」でも特集されており、東日本大震災をきっかけに自分たちにできることは何かを考えて、入浴施設などを回って、各地の方たちを元気づけるという個性的な活動が紹介されていてとてもよかった。
- 12月16日(日)に大河ドラマ「西郷どん」が最終回を迎えたが、放送中に札幌の火災に関するニュース速報が入った。ニュース速報が入る基準のようなものはどうなっているのか教えてほしい。

(NHK側)

札幌の火災に関するニュースについては、一報であまりにも激しく燃え上がっている映像を見て、大惨事になる可能性があるということでニュース速報を出した。必ずしも一律に基準が定められているものではないが、担当者がそのつど判断し、伝えなければいけないニュースを速報している。

- 12月4日(火)の先人たちの底力 知恵泉「人の役に立つには 社会事業家 賀川豊彦」を見た。豊彦は、戦前に個人の善意から活動を始めて、貧困などの社会問題を解決しようとした人で、徹底した共助は公益につながることを体現された人だと思うが、番組では単に偉人として紹介するのではなく、現代の問題に引きつけて取り上げており大変よかった。今のNPO法人で活躍されている人が出演し、豊彦とあたかも対話するような形で番組が進行したのもよかった。ただ、豊彦の思想は今回取り上げられたもの以外にも、さまざまなところに影響を及ぼしたと思われる

ので、もっと掘り下げて紹介してもらえればなおよかった。

- 先人たちの底力 知恵泉「人の役に立つには 社会事業家 賀川豊彦」を見た。今改めて、豊彦のような偉大な先人が日本にもいたことをクローズアップすることに意義を感じた番組だった。
- 12月4日(火)のハートネットTV「平成がのこした宿題」、第3回「ひきこもり」、12月5日(水)の第4回「自殺～生き心地のよい社会へ～」を見た。この平成30年間の何が問題だったのか、生き心地のいい社会とはどういう社会なのか問いただす内容で、いずれの課題も大きな社会問題となっていることがよくわかった。画一的な価値観の中で、毎日どう過ごせばいいのか、どう生きていけばいいのかについて、出演者や当事者がしっかりとメッセージを伝えていた。共通しているのは多様な考え方、スタイルを受け入れる社会作り、共感力を持った人間作りの必要性である。他人事ではなく、これから生きる私たち一人一人が変わっていかねばならないということを強く提起していた。今後シリーズの最後にどのようなまとめ方をするのも関心を持って見続けていきたい。
- 11月27日(火)のBS1スペシャル「瓦礫(がれき)のピアニスト」に感銘を受けた。シリア人の青年ピアニストが広島を訪れ、被爆したピアノを弾くことで、復興を遂げた広島の姿を自分の人生と重ね合わせている場面はとても感動的だった。移民に対するドイツ社会の意識の変化、移民たちが抱えるさまざまな苦悩や今置かれた状況を効果的に浮かび上がらせており、シリア内戦がもたらしている悲劇を改めて伝える印象的な番組だった。「BS1スペシャル」でこういった海外の話題を取り上げる意義を改めて感じさせるとてもよい番組だった。
- 11月23日(金)のアスリートの魂「大分国際車いすマラソン」を見た。これまでは、まず選手のバックグラウンドを取り上げてから競技を見せるという取り上げ方が多かったと思うが、この番組では一アスリートのスポーツイベントとして取り上げており、大変よかった。
- 8月22日(水)のスペシャルドラマ「太陽を愛したひと～1964 あの日のパラリンピック～」(総合 後10:00～11:10)は大変すばらしかったが、このようなパラリンピックに関する番組をもっと放送してほしい。
- 発達障害キャンペーンの一環として放送された「ふつうってなんだろう？」というアニメシリーズを見た。当事者からみた世界を描いていて、視聴者もアニメを通

して体験することで理解がより進み、発達障害の方の生きづらさの軽減につながるのではないかと感じた。発達障害を障害ではなく、「それぞれの普通」という表現をしているのもとても良かった。人はみな違っていて、一人一人の特徴がそれぞれの個性として社会から受容されるようになってお互いのコミュニケーションが円滑になるし、番組を通じて社会全体のモラルが上がるのではないかと思わされた。このキャンペーン期間だけではなく、継続して見られるような番組をお願いしたい。

- 発達障害キャンペーンの関連番組を、ほとんど視聴した。印象としては大変幅広く、いろいろな角度、分野を取り上げていた。発達障害の子どもを持つ親たちも自分のケースに当てはまる事例があったのではないか。また、時代が変わったと感じたのは、従来はこの障害に対して、いわゆる治療モデル、よくない状態だから治しましょうというスタンスが強かったと思うが、今回は生活モデル、つまり障害を治すものではなく、それを抱えながらどう意味ある生き方をしていくかを応援する内容になっていたのが大変よかった。特に印象に残っているのは、11月14日(水)のハートネットTV「続・自閉症アバターの世界 解放の地を探して」、11月22日(木)の所さん！大変ですよ「誕生！？伝統工芸の救世主」、11月24日(土)の「発達障害って何だろうスペシャル」だ。よくこれだけいろいろな人々を見つけてきたとNHKの取材、情報収集力に感心するとともに、これまでのさまざまな蓄積が生きたのではないかと思った。
- NHKのドラマのホームページを見て、見たいドラマの再放送があると思ったらBS4K・BS8Kでしか放送されないことがある。それぞれBS4K・BS8K、BS、地上波などマークで区別できるといいのではないか。
- ドラマ10「昭和元禄落語心中」が先日終わったが、大変映像がきれいで、あまり関心がなかった落語をきちんと丁寧に聞いてみたいと思った。ドラマの後などに、以前放送されていた「落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～」のような落語を取り上げた番組を再放送するような工夫も考えてみてはどうか。ドラマでこま切れに聞いていた落語作品をきちんと聞いてみたいという思いに応えてほしい。

(NHK側)

「落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～」は俳優の東出昌大さんが案内役となり、落語の魅力を紹介する番組で、新作を1月にEテレで放送する予定だ。同じ日の日中には過去放送した番組の再放送も予定している。

- ドラマ10「昭和元禄落語心中」や「超入門！落語THE MOVIE」の影響なのか、20代の学生でも、落語に興味を持つ人が増えてきていると感じている。寄席に行かなければ見られなかった落語に、テレビで身近に接することで、学生にとっても興味を持つきっかけになっていると思う。古いけれども日本らしいものを取り上げることで、かえって若者には新鮮に受け取られるのではないかと思った。
- 本の世界には「今年の3冊」や「本屋大賞」などがあるので、NHKの番組でも今年のベストテンがあれば、番組制作者の励みになると思う。私の中で印象が深かった番組は「チョコちゃんに叱られる！」だった。その次はドラマ10「昭和元禄落語心中」だが、本当に引き込まれるよい番組だったと思う。NHKスペシャル「人体 神秘の巨大ネットワーク」シリーズも大変おもしろかった。
- 「チョコちゃんに叱られる！」は若者だけではなく、年配の方にも人気が出てきているようで、いろいろな場面で、チョコちゃんの「ポーっと生きてんじゃねーよ！」というセリフを見聞きするようになった。こうしたことを通じて、NHKが変わってきていると実感している。若者にどうアピールするか試行錯誤しているようだが、引き続きチャレンジを続けてほしい。

NHK編成局
番組審議会事務局